

ロールシャッハ・テストにおける二者関係と一次過程思考

吉 村 聡

本研究では、ロールシャッハ・テストにおける一次過程思考に対する検査者の影響を検討した。被検者は105名の学生であった。一次過程思考は、Holtのロールシャッハ・テストを用いたスコアリングシステムに準拠して測定された。結果、検査者と個人的な面識を持つ被検者のロールシャッハ・テストプロトコルには、検査以前に検査者との面識を持たなかった者のロールシャッハ・テストプロトコルに比べて、より多くの一次過程思考（特に口唇／性愛的な内容）が含まれていることが明らかになった。しかし、この傾向を攻撃的な反応内容や適応的退行について確認することはできなかった。検査者／被検者間の性別の組み合わせの違いについても、一次過程思考の相違との有意な関連は見られなかった。以上の結果から、検査者は被検者と面識のある場合に、ロールシャッハ・テストプロトコルにおける一次過程思考の表れに影響を及ぼしうるが、検査者の性別や個人差は被検者に有意な影響を及ぼさないということが論じられた。したがって、ロールシャッハ・テストの結果を分析するにあたっては、検査者と被検者の関係性を含んだテスト状況への配慮が重要であることが論じられた。

キー・ワード：ロールシャッハ・テスト、検査者の影響、検査者／被検者関係、一次過程、テスト状況

1. はじめに

心理テストを用いたアセスメントを実施する場合に、質問紙法による場合と投影法による場合とでは検査のもつ性質も結果の意味するところも大きく異なることは周知の事実である。質問紙の実施が被検者一人でも可能であるのに対して、ロールシャッハ・テストに検査者の存在は欠かせない。ロールシャッハ・テストは検査者と被検者の二者関係を基盤としており、この二者関係の下、被検者は検査者から様々な影響を受けるのである（Baughman,1951; Gibby, Miller, & Walker,1953; Marwit & Marcia,1967; Masling,1965; 小此木・馬場,1989; Schafer,1954など）。そのため、ロールシャッハ・テストが「一つの面接場面（秋谷,1988; 藤岡,1991; 氏原,2001）」「体験の伝達—了解を軸とする検査・被検者間の対人関係（川畑,1998）」と評されることも稀ではない。したがって、

東北大学大学院教育学研究科講師

ロールシャッハ・テストも心理テストの一つであり、信頼性、客観性、妥当性を大切にしなければいけないことは事実であるのだが、検査者の存在という「統制しきれない要因」が介在する可能性を孕んでいるといえる。この意味では、ロールシャッハ・テストも心理臨床面接と何ら変わるところはない。

ロールシャッハ・テストが抱えるこの構造上の特徴、つまり対人関係場面としての検査性質があるがゆえに、被検者は必ずしも全ての知覚体験を検査者に伝えるわけではない。検査者との関係の中で、被検者はどの反応を伝達するかを判断することになる。このときの反応の検閲 (Exner,1993) に、検査者と被検者の転移／逆転移 (Athey,1986; Lerner,1988) や、被検者によるテスト場面の主観的な定義づけ (Schachtel,1966) が何らかの作用を及ぼすものと推察される。特に言語化しようとしている反応が、「一次過程思考」という「社会的に禁忌とされ (Russ,1988)」「社交場面での発言は問題視される (Holt,1977)」、想念を含む場合、被検者は検査者の存在を意識／無意識的に感じざるを得ないだろう。しかもロールシャッハ・テストは退行を促しやすく、性器図版と呼ばれるものさえ含まれるほど、性的な連想を喚起しやすいことが知られている (馬場,1995)。したがって、被検者はしばしばこの一次過程思考を誘発されるが、これをすべて検査者に伝えるわけにはいかないという葛藤の生じる可能性がある。その意味で、被検者から検査者への一次過程思考の伝達は、検査者と被検者の関係による影響が反映されやすい例として考えることができるだろう。

以上の論考をふまえ、本研究では、ロールシャッハ・テストでの検査者と被検者との関係が被検者の一次過程思考の表れに与える影響を検討する。ロールシャッハ・テストによる一次過程思考の測定には、Holt (1977) の一次過程表象スコア (Scales for Primary Process Manifestation) の中から、一次過程思考スコア (Primary Process Thinking Score、以下PPR%)、口唇／性愛的反応内容スコア (Libidinal Content Score、以下Lib%)、攻撃的反応内容スコア (Aggressive Content Score、以下Ag%)、適応的退行スコア (Adaptive Regression Score、以下ARS) を用いる。なお、一次過程表象尺度の概略については、本論文の巻末に付したAppendixを参照されたい。

本研究では、これらの一次過程表象尺度を用いて、以下の二点に関する検討を行う。

(1) 検査者やその性別が被検者に与える影響：複数の検査者ごとに、被検者のロールシャッハ・テストプロトコルの一次過程表象尺度の値を比較する。さらに、検査者と被検者の性別の組み合わせに基づく比較も行う。

(2) 検査者と被検者との面識の有無に伴う一次過程思考表出の差異：検査者と被検者の間に面識のある条件と、初対面の条件とで一次過程表象尺度の比較を行う。

なお仮説としては、いずれの検証においても、検査者／被検者が「同性の組み合わせ」「面識のある組み合わせ」の場合、一次過程思考の表出に対する葛藤が少なくなると予想される点で、被検者のロールシャッハ・プロトコルに含まれる一次過程思考は増加することが予想される。

2. 方法

2. 1. ロールシャッハ・テスト

ロールシャッハ・テストは包括的システム（高橋・西尾，1994）に準拠した。また、一次過程思考に関する各尺度（PPR%，Lib%，Ag%）と適応的退行（ARS）の各尺度の得点算出はHolt（1977）にしたがった。

2. 2. 手続き

本研究は、以下の二条件にしたがい、順にロールシャッハ・テストを施行することで行った。なお、今回分析の対象とした検査者と被検者のプロトコルは、いずれも都内私立大学におけるロールシャッハ・テストの演習授業の一環として実施されたものである。

（1）検査1 検査者と被検者の間に面識のない条件
検査者5名（男性2名、女性3名）、被検者50名（男性14名、女性36名）。検査者は予め包括的システムについて学習している臨床心理学専攻の大学院生であった（Table 1を参照）。分析対象は、以下の「2. 3. 分析対象者の選出」の手続きによって1999年度または2000年度に上記演習授業を履修した学生の提出したプロトコルの中から抽出した。この「検査1」による条件での検査者と被検者の共通点は双方の都合のつく日程という点のみであり、両者の間に個人的な面識はなかったことが確認されている。

	性別	年齢	被検者数
検査者A	男性	28	10
検査者B	女性	36	12
検査者C	女性	25	13
検査者D	女性	23	5
検査者E	男性	27	10

（2）検査2 検査者と被検者との間に何らかの面識がある条件
検査者・被検者ともに50名。検査者は検査1で被検者だった者。検査者が、上記授業のレポート課題としてロールシャッハ・テストを実施したのがここでの被検者（男性18名、女性32名）である。被検者は検査者が任意に依頼した者であり、両者は既知の間柄にあった。その関係の内訳は「友人・先輩・後輩など」が74%、「家族」が26%であった。

2. 3. 分析対象者の選出²

ロールシャッハ・テストのプロトコルは、以下の手順によって選び出された。

（1）検査2で行われたロールシャッハ・テストのうち、①検査の実施方法に大きな問題がないこと（必要な場合には反応数の統制を行っていること、過度の質疑や直接的・誘導的な質疑を行っていないこと等）、②反応数が14以上であること、③検査者と被検者との関係および性別が明記されていること、の全ての条件を満たすものを選び出した。その中からランダムに50名を抽出し、これを分析対象の被検者とした。

（2）検査1の被検者は検査2の検査者であることから、検査2での検査者その人のロールシャッ

ハ・テストプロトコルが、検査1での被検者のプロトコルとして取り扱われた。

Table 2
検査者／被検者の関係と一次過程表象尺度

	平均値	中央値	標準偏差
PPR% 検査1 (面識無)	0.266	0.243	0.143
検査2 (面識有)	0.377	0.321	0.164
ARS 検査1 (面識無)	1.110	1.214	0.568
検査2 (面識有)	1.188	1.323	0.650

Note: 両検査ともにN=50

Table 3
検査者／被検者の関係と一次過程的反応内容

	平均値	中央値	標準偏差
Lib% 検査1 (面識無)	0.062	0.056	0.050
検査2 (面識有)	0.092	0.083	0.068
Ag% 検査1 (面識無)	0.192	0.150	0.127
検査2 (面識有)	0.209	0.214	0.104

Note: 両検査ともにN=50

3. 結果

検査1の5人の検査者による被検者群のロールシャッハ・テストから算出したHolt (1977)の4尺度について、その中央値をKruskal-Wallis検定によって比較した。結果、各検査者の間でPPR%、ARS、Lib%、Ag%のいずれにおいても有意差は見られなかった(順に $\chi^2=3.798, 5.298, 3.846, 3.950, df=4, n.s.$)。また、検査者の性別ごとに分けて、男性検査者2名による被検者群(N=20)と女性検査者3名による被検者群(N=30)との間と同じく尺度の中央値を比較(U検定)した。その結果、女性検査者による被検者のプロトコルにLib%が10%水準ながら多く含まれる傾向が示されたが($Z=-1.736, df=1, .05 < p < .10$)、PPR%、ARS、Ag%の各尺度での有意差は見られなかった(順に $Z=.336, -1.447,$

$-1.436, df=1, n.s.$)。検査者と被検者の性別の組合せによって4群に分け(検査者／被検者の順に、男性／男性が7組、男性／女性が13組、女性／男性が7組、女性／女性が23組)、Kruskal-Wallis検定によってその中央値を検討した場合にも、群間に統計的な有意差は見られなかった(PPR%、ARS、Lib%、Ag%の順に $\chi^2=1.565, 3.366, 5.233, 2.771, df=3, n.s.$)。

さらに、検査1の被検者群と検査2の被検者群のそれぞれから得られた一次過程思考の各尺度値をU検定によって比較した。その結果、検査2におけるPPR%の値は検査1における値よりも有意に高く($Z=-2.248, df=1, p < .05$; Table 2を参照)、この傾向を反応内容についてみると、Lib%にその差を認めることができた($Z=-2.234, df=1, p < .05$; Table 3を参照)。しかし、両検査間でのARSやAg%の値に、有意水準での差は生じていなかった(順に $Z=-1.345, -1.372, df=1, n.s.$)。

4. 考察

4.1. 検査者の属性と被検者のロールシャッハ・テストにおける一次過程思考

本研究では、検査者と被検者の組み合わせの相違がロールシャッハ・テスト上に表現される一次過程思考に与える影響について検討した。結果、女性がロールシャッハ・テストを実施した場合に

その被検者のプロトコルには口唇／性愛的な反応内容が多く含まれていたが、この場合の差は10%水準での有意傾向にとどまっていた。この女性検査者による被検者を性別ごとに比較した場合、口唇／性愛的な反応内容の頻度に関する有意差は認められなかったこと、さらにその他の一次過程思考の質・量についても群間での有意差を確認するには至らなかったことから、「検査者の性別による被検者の影響がある」と論じることには慎重を期する必要があるだろう。したがって、検査者の相違が被検者のロールシャッハ・テストにおける一次過程思考のあり方に一貫した影響を与えるという仮説について、統計的な見地からの支持は困難であると考えられ、追試研究による更なる検討を待つ必要がある。

本研究では個々の検査者の相違による影響を確認できなかったのに対して、いくつかの先行研究では検査者の個人差が反応数や濃淡反応の数などに影響することが確認されている（たとえば Gibby, Miller, & Walker, 1953）。先行研究と照らし合わせたときに結果の違いが生じた原因として、ここでは二通りの可能性を考えることができる。第一に考えられるのは、ロールシャッハ・テストにおける一次過程思考の表出に対し、検査者の性別や個人差などの特性はさしたる影響を与えないという可能性である。つまり、検査の状況さえ同一であるならば、一次過程思考という思考様式に関する検査者の影響は顕著なものにはなりにくいことが考えられる。仮に反応数や濃淡反応などがそうした影響を受けやすいものであるとするならば、一次過程思考は、検査者の影響を受けにくい変数の一例として考えられるだろう。

検査者による差異が認められなかった第二の理由には、ロールシャッハ・テストの実施方法の違いをあげることができる。検査者の影響を検討した先行研究では、BeckやRapaportなどの手法によってロールシャッハ・テストが実施されているが、本研究での実施方法は包括的システムである。仮説としては、この包括的システムによる実施方法が、検査者からの影響を生じさせにくいことが考えられる。たとえば、包括的システムでの質疑段階は、主として自由反応段階での知覚を確認し、あくまでもスコアリングに必要な情報を得る場として定義されている。加えて、形態水準を統計的な頻度に基づく客観的な評定に拠っているために、その質疑は他の技法でロールシャッハ・テストを実施した場合に比べて短くなる傾向にある。そのため、検査者と被検者の間で、言語的に交わされる交流も限られてくることが予想される。本研究で検査者による相違が認められなかった背景には、この「被検者への侵入性の低さ」の影響があるのかもしれない。

4. 2. 検査者と被検者との関係とロールシャッハ・テストにおける一次過程思考

検査者と被検者との間に検査以前から面識があったかどうかという関係性に着目し、この面識の有無がロールシャッハ・テストにおけるHolt (1977) の一次過程表象尺度得点に差異をもたらすかどうかを検討した。結果、検査者によって任意に被検者を選択できた「検査2」の被検者（検査者との間に何らかの面識があった群）のロールシャッハ・テストプロトコルの方が、検査者と被検者とが初対面だった「検査1」の条件によるものよりも、多くの一次過程思考を含むことが明らかとなった。この傾向は、口唇／性愛的な反応内容が総反応数に占める割合については認められたが、

攻撃的な反応内容について同様の傾向は認められなかった。そしてこの結果は、自分の治療者にロールシャッハ・テストを受けた患者の方が、初対面の治療者に受けた場合よりも有意に多くの性反応を報告したというExner, Armbruster, and Mittman (1978)の研究や、被検者が検査者の友人である場合に性反応が増加するという高橋・北村 (1981)の指摘を踏襲するものである。

その一方で、反応に含まれる一次過程思考と形態水準の双方を問題にした適応的退行については、両条件間で有意差が生じていなかった。このことは、検査者と被検者とが既知の間柄にあることで、被検者のロールシャッハ・テストプロトコルに含まれるプリミティブな反応様式・反応内容は増加する傾向にあるものの、それに伴って形態水準によって表される現実吟味能力までが顕著に損なわれるとは限らないことを意味している。実際、ある種の非患者成人のプロトコルに性反応が比較的高頻度で見られることも知られているが(馬場, 1961)、だからといって非患者成人の現実吟味能力全体に問題があると考えることには無理がある。つまり、ある一定量の一次過程思考がロールシャッハ・テスト上で認められたからといって、そのみをもって病態を論じることは難しいということになる。むしろ問題になるのは表現された一次過程思考の質と量であり、それが表れた反応の継起であろう。そして、この一次過程思考の「質と量」は検査者と被検者の関係によって左右される可能性が高いとしても、一次過程思考を含む反応の形態水準は二者関係の影響を受けにくいということが言えそうである。それだけ、形態水準評定の重要性は高いということにもなるだろう。

こうした本研究における一次過程思考の差異は、検査者と被検者の「面識の有無」によって生じている。しかし、この「面識の有無」という要因の中には、そこから生じるいくつかの影響因を仮定することができる。たとえば、この関係の相違によって両者の間で初対面特有の緊張感が変容／消失したり、「テストする側とされる側」という役割の含みもつ一種の権威的な性質が不明瞭になることもあるかもしれない。また、被検者がロールシャッハ・テストにどのような目的意識をもって臨んだか、ロールシャッハ・テストの意味をどのように捉えたかという点でも、両検査条件は大きく異なっているだろう。あるいは、そもそも検査者と被検者の間に面識があるという状況設定は、ロールシャッハ・テストを実施するにあたっての両者の間のラポール形成に、非常に大きな作用を及ぼすといえる。つまり、検査者／被検者の関係は、被検者のテスト受検に対する構えを様々な点で変えてしまう可能性があり、これらが複合して一次過程思考の表れに影響を及ぼしているものと推察される。

ここで興味深いのは、こうした影響が口唇／性愛的な反応内容には認められながら、攻撃的な反応内容には確認できなかった点である。このことは、ロールシャッハ・テスト場面では二者関係を媒体として依存退行願望が触発されやすいか、あるいはすでに触発されていたこの種の欲動の表出が促されやすいこと、そして攻撃的な欲動は二者関係の性質によってそれほどの影響を受けないことを意味している。

検査者と被検者との関係性の相違によって、攻撃的な反応内容に対する差異が見られなかった背景として、被検者の検査に対する抵抗の問題を考えることができる。ロールシャッハ・テストはもと検査者主導の構造を有しており、「受ける」というよりも「受けさせられる」ものとして体験

されがちである(馬場, 1961)。しかし、検査者と被検者との関係が親密であると、この被検者の不安や抵抗が微妙に変化することが予想される。つまり、検査者と被検者の心理的な距離が近づくにつれて、検査者に対する緊張が和らぎ、「させられ体験」や内面を見られることに対する不安・怒り・抵抗が緩和される場合もあるだろうし、逆に親密であるがゆえに内面を見られることへの抵抗が強まる場合もあるだろう。つまり、検査者との関係から受ける影響という観点から考察した場合、被検者による攻撃性の投映については複数のパターンを想定することが可能であり、それゆえに統計的に一貫した結果が得られなかったのではないかと考えられる。今後は、この仮説に関して事例検討も含めた詳細な考察が求められるところである。

5. まとめと問題点

本論では、ロールシャッハ・テストにおける検査者や検査状況が、そこに表現される一次過程思考に与える影響について検討した。結果、個々の検査者や検査者／被検者の性別の組合せ等の「検査者の要因」による明確な影響は認められなかったが、検査者／被検者間の面識の有無という「検査者／被検者の関係性」の影響は受けやすいことが明らかになった。以上の結果から、ロールシャッハ・テスト解釈におけるテスト場面での対人関係の視点の重要性が提起されている。臨床群のロールシャッハ・テスト解釈にこの視点が不可欠であることはいうまでもないが、さらに臨床群のプロトコルと非患者群のものとを比較する場合にも、それぞれの条件における対人関係の違いに注意する必要があるだろう。

しかし、本研究には問題点もある。一つは、検査2の被検者が任意に検査者を依頼している点である。実験計画上必要であるとはいえ、検査者が知り合いの中から被検者を自由に選ぶという点で、それらの被検者群に「ロールシャッハ・テストを頼みやすい人」という共通項が生じている可能性もある。もしそうであるならば、本研究での検査者／被検者の二者関係には、「検査を頼みやすい人であるか否か」という剰余変数が含まれている可能性も生じてしまう。

また、検査者のロールシャッハ・テスト習熟度も問題になりうる。ほとんどの場合、検査者のロールシャッハ・テスト学習期間は限られており、特に「検査2」の大部分の検査者は、本研究での実施が初めての体験である。参考までに、「検査1」での検査者5名をロールシャッハ・テスト経験年数の相違(3年以上と未満)で二群に分けて、本研究での一連の比較を行ったところ、全ての変数について両群間で有意差は認められなかった。したがって、一次過程思考の表出については、最低限の実施方法さえ遵守されていれば経験年数の問題はさしたる影響因にはならないという可能性もある。いずれにしても、この分析は検査者の数が非常に限られた予備的なものであり、今後、より詳細な検討が必要とされるところである。

Appendix

ロールシャッハ・テストによる一次過程表象尺度(Holt, 1977)の概要

一次過程表象尺度は、以下の一次過程思考スコアと適応的退行スコアに大別される。いずれのス

コアについても、精神分析的な理解を前提としたスコアリングシステムであり、この理論に対する一定の知識が不可欠であることに留意されたい。なお、Holt (1977) のスコアリングシステムは複雑かつ詳細なものであり、紙面の関係上、ここでそのすべてを紹介することは断念せざるを得ない。システムの全容については、Holt (1977) を参照されたい。

1. 一次過程思考スコア (PPR%)

一次過程思考スコアは、精神分析に基づく象徴理解を含む「反応内容」、論理的な思考からの逸脱などを含む「一次過程的反応様式」、その他の「防衛・統制」の3つのカテゴリーから構成されている。これらのカテゴリーの中で、「反応内容」「一次過程的反応様式」に属するいずれか一つ以上の基準に該当した反応を、一次過程思考反応と定義している(一次過程思考スコアは、ロールシャッハ・テストの全反応数に対する割合で算出される)。また、スコアリングに際して、反応における一次過程思考がそのままの形で露呈されている場合「1」を、社会的に容認される形に修正されている場合「2」を一次過程を表す記号に付記することで、一次過程のレベルを分けた評定が行われている。

(1) 一次過程的反応内容

以下の「性的反応内容」「攻撃的反応内容」の2種類から構成される。

a) 性的反応内容

「口唇／性的受容 (L1O, L2O)」「肛門的内容 (L1A, L2A)」など、7項目

<反応例> 「(単独で見られた) 口 (L1O)」「下着 (L2E-V)」

b) 攻撃的反応内容

「攻撃性 (Ag1A, Ag2A)」「攻撃の被害 (Ag1V, Ag2V)」「攻撃の結果 (Ag1R, Ag2R)」の3項目

(2) 一次過程的反応様式

被検者の言語表現の中から、「圧縮」「置き換え」「象徴」「矛盾」「その他の病理的な言語表現」のいずれかに該当する反応に対して、記号を付記する。以下に示すのは、「圧縮」「置き換え」からの例である。

a) 圧縮

「混合 (C-co1, C-co2)」「色彩と形態の恣意的結合 (C-arb1, C-arb2)」など、6項目

<反応例> 「頭が二つあるザリガニ (C-co1)」「赤く塗られたトラ (C-arb2)」

b) 置き換え

「連鎖的反応 (D-chain1)」「時間の置き換え (D-time2)」など、5項目。

<反応例> 「騎士。タバコを吸おうとしてヘルメットを脱いでいるところ。(D-time2)」

(3) 防衛・統制

上述の「一次過程的反応内容」「一次過程的反応様式」のうち、少なくともいずれか一方に該当した反応のみをスコアリングの対象とする。項目としては、「距離」「コンテクスト」「その他の防衛・統制」「オーバートネス」があげられている。なお、統制が良好であると考えられるものについて

は、記号の末尾に「+」を付記する。経験的に統制の不良が知られているものについては、あらかじめ記号の末尾に「-」が指定されている。以下に示すのは、「コンテクスト」「その他の防衛」からの一例である。

a) コンテクスト

「文化 (Cx-C)」「芸術 (Cx-E)」「知性化 (Cx-I)」「ユーモア (Cx-H)」の4項目。

<反応例> 「二人の人。二人には男性器と女性器がある。男女の区別がつかない服を着ているといってもいいけど (Cx-H+)」

b) その他の防衛・統制

「内省 (Refl)」「反応の適応的修正 (Mod+)」など、16項目。

<反応例> 「女性にペニスがあるのはおかしいのですが、そう見えてしまうのです (Refl)」「胸のある男の人。いや、襟の折り返しが飛び出ているところ (Mod+)」。

2. 適応的退行スコア

適応的退行スコアの算出は、上述の一次過程思考スコアと形態室評定をもとに行う。算出方法の概要は以下の通りである。

(1) 一次過程思考スコアを元に、「防衛要求スコア (DD)」を定める。この防衛要求スコアは、反応に認められる一次過程思考の要素がごくわずかであるためにほとんど防衛の必要性がないと考えられるもの (DD=1) から、精神病者のプロトコルに特有のもので、防衛の必要性が極めて高いもの (DD=6) までの6段階評定で構成されている。

(2) Maymanの形態水準評定をもとに、仮の「防衛効率性スコア (DE)」を定める。この値は、F+反応に与えられる2点を最高点に、F-反応とFs反応 (破壊的明細化反応) に与えられる-1点までの6段階で評定される。

(3) 上記によって得られたDEに、以下の三点、すなわち、①反応に伴われた情緒の性質、②防衛・統制スコア意に付与された+ (-) 評定の有無、③臨床観察 に応じた得点の調整を行う。これによって、最終的な防衛効率性スコアの値を確定する。この最終的な値は、+2点から-3点までの11段階評定と定められている。

(4) 適応的退行スコアを、以下の(数式1)によって算出する。なお、PPRは、一次過程思考スコアに該当した反応数を指している。

$$ARS = \frac{\sum (DD \times DE)}{PPR} \quad (\text{数式1})$$

【文献】

秋谷たつ子 (1988) ロールシャッハ法を学ぶ, 金剛出版.

Athey, G.I. (1986) Rorschach thought organization and transference enactment in the patient-examiner

- relationship. In M.Kissen (Ed.), *Assessing object relations phenomena*. Madison, Connecticut: International Universities Press, pp.19-50.
- 馬場禮子 (1961) 自我心理学に基づくロールシャッハ・テストの了解について ロールシャッハ研究IV, 155-169.
- 馬場禮子 (1995) ロールシャッハ法と精神分析—継起分析入門. 岩崎学術出版社.
- Baughman,E.C. (1951) Rorschach scores as a function of examiner differences. *Journal of Projective Techniques*, 15, 243-249.
- Exner,J.E. (1993) *The Rorschach: A comprehensive system. Vol.1: Basic foundations. 3rd edition*. New York: Wiley.
- Exner,J.E., Armbruster,G.L., & Mittman,B. (1978) The temporal stability of some Rorschach features. *Journal of Personality Assessment*, 42, 27-38.
- 藤岡喜愛 (1991) ロールシャッハ法, 氏原寛・小川捷行・東山紘久ほか (共編) 心理臨床大辞典, 培風館, 519-527.
- Freud,S. (1900) Traumdeutung. [高橋義孝訳 (1968) 夢判断. フロイト著作集2. 人文書院.]
- Gibby,R.G., Miller,D.R. & Walker,E.L. (1953) The examiner's influence on the Rorschach protocol. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 425-428.
- Holt,R.R. (1977) A method for assessing primary process manifestations and their control in Rorschach responses. In M.Rickers-Ovsiankina (Ed.), *Rorschach Psychology, 2nd ed.* New York: Robert E. Klieger, pp.375-420.
- 川畑直人 (1998) ロールシャッハ反応と人間関係, 吉田圭吾 (編) 人間関係と心理臨床, 培風館, pp.131-143.
- Lerner,P.M. (1988) Rorschach measures of depression, the false self, and projective identification in patients with narcissistic personality disorder. In H.D.Lerner & P.M.Lerner (Ed.), *Primitive mental states in the Rorschach*. Madison, Connecticut: International Universities Press, pp.71-94.
- Marwit,S.J. & Marcia,J.R. (1967) Tester-bias and responses to projective instruments. *Journal of Consulting Psychology*, 31, 253-258.
- Masling,J. (1965) Differential indoctrination of examiners and Rorschach responses. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 198-201.
- 小此木圭吾・馬場禮子 (1989) 新版精神力動論—ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合. 金子書房.
- Russ,S.W. (1988) The role of primary process thinking in child development. In H.D.Lerner & P.M.Lerner (Ed.), *Primitive mental states in the Rorschach*. Madison, Connecticut: International Universities Press, pp.601-618.
- Schachtel,E.G. (1966) *Experimental Foundations of Rorschach's testing*. New York: Basic Books. [空井健三・上芝功博訳 (1975) ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房]
- Schafer,R. (1954) *Psychoanalytic interpretation in Rorschach testing*. New York: Grune & Stratton.
- 高橋雅春・北村依子 (1981) ロールシャッハ診断法I. サイエンス社.
- 高橋雅春・西尾博行 (1994) 包括的システムによるロールシャッハ・テスト入門—基礎編. サイエンス社.
- 氏原寛 (2001) 心理検査Vol1 1-1—ロールシャッハ・テストの基本. 臨床心理学 1-2, 金剛出版, 255-262.
- 吉村聡 (1999) ロールシャッハ・テストにおける一次過程的思考と適応的退行. ロールシャッハ法研究3, 51-61.

【脚注】

- 1 Freud (1900) は、夢に見られるような快感原則にしたがった原始的な心理過程を一次過程 (primary process) と呼んだ。この一次過程は「圧縮」と「置き換え」の機制を基盤としており、局所論的な見地からは、無意識系で機能する過程であると考えられている。この一次過程は、欲動や願望の充足を第一義の目的としているところに大きな特徴がある。

- 2 本研究における検査者が、ロールシャッハ・テストの実施者としての修練や経験の面で未熟であることは否めない。本来ならば、経験豊富な検査者のみから構成された実験を行うことが望ましいことは事実である。しかし、その場合は、どうしても検査者の数は限られたものになりがちであり、結果として統計的な比較を望むことは大変に困難になってしまう。検査者と被検者の相互作用を統計的に追究する類の研究報告が本邦においては皆無に等しいという実情は、統計的に検定可能なだけの検査者と被検者を集めることが著しく困難であるという事情によっているのではないだろうか。ただし、包括的システムによるロールシャッハ・テストの実施は、特にその質疑が簡略化されている点に大きな特徴がある。したがって、検査方法を習得するための労力や時間が他の手法に比べて短くてすむ可能性はあり、この点で従来からの大きな問題の多くを回避することが容易になるだろう。本論文では、この包括的システムによる実施であるという点に加えて、筆者がロールシャッハ・プロトコルの一つ一つを確認して不適切な実施方法によるプロトコルを排除することで、検査者の経験不足がもたらす要因をできるだけ排除するように心がけている。しかしそれでもなお、経験年数や臨床感覚から生じるような、より細かな検査者の「雰囲気」が被検者に及ぼす影響もあることであろう。こうした微妙な検査者-被検者関係の問題については、今後の研究課題として残されているが、いずれにしても、本研究はこうした「より本格的な研究」に向けての予備的研究として、その意義は十分にあるものと筆者は考えている。

A Rorschach Study of the Examiner's Influence on Primary Process Manifestation

Satoshi YOSHIMURA
Assistant Professor, Graduate School of Education, Tohoku University

This article investigated the examiner's influence on primary process manifestation on the Rorschach. Subjects were 105 students. Primary process manifestation was measured with the Holt scoring system for the Rorschach. Results showed that Rorschach protocols of subjects, who had personal acquaintances with examiners, contained more primary process manifestation (especially oral/sexual contents) than those of subjects who had no prior contact with examiners. However, this pattern was not observed in aggressive content responses, nor in adaptive regression scores. Sex differences in examiner/subject relationship were not significantly related to the manifestation of primary process on the Rorschach. These results were considered that examiners can influence on the Rorschach protocol when they have some acquaintances with their subjects, but the primary process manifestation on the Rorschach was not significantly influenced with sex difference or individual difference of the examiners. The author therefore argued that the importance of the analysis of the testing situation, especially the relationship between the examiner and the subject.

Key Words : The Rorschach, examiner's influence, examiner/subject relationship, primary process, testing situation